

生涯学習は、人それぞれの「生きがい」に関わってくる。「生きがい」とは、ある目標に向かって、自らの道を行んでいく過程である。

私は、定年退職してから、高齢者の仲間入りをした。一日の時間の中に「生きがい」をどう設定するかと考えて、生涯学習に取り組んだ。

まず最初は、苦しみの学習をして、次に楽しみの学習を選ぼうとした。そして、社会的職業的なものを身につけるため、神職の資格をとろうと決めた。ずぶの素人が専門職になろうとしたのだから、本当に苦労と不安の連続であった。しかし、神社本庁より階位認定証を戴いて一つの目標が終了したので、今度は余暇の時間を趣味的学習に求めて、楽しむ学習を選んだ。

まず、通信教育に目をつけた。囲碁、和歌、俳句、風水、易、四柱推命等々、一つが終了したら、次へと選択していった。易の師範鑑定士の認定証をもらったのもこの講座であった。

通信教育での学習は、終了したときよりも、学習していた過程が楽しく張り合いがあった。通信教育による学習が一段落した後は、様々な人々との交流に学習を求めた。

県のことぶき勸学院・同大学院、或いは話の会や他の同好の人たちとの集い等々である。異なる年齢層、様々な職業、違う人生観の人たちとの交流である。この交流で感得した学習は、いわゆる人間学を学んだことである。

私の歩んできた私の生涯学習は、このような単純なものであったが、これからも許される限り、未知の世界へ挑戦する楽しさを求めていきたいと思っている。



生涯学習通信 生涯学習推進会議

のびのび いきいき 生涯学習

『わたしの生涯学習』



かつての我が国は、学校教育を中心として、物の貧しい社会の中でどうしたらその貧しきから脱却するかという教育を考えました。簡単にいえば、立身出世の道具として教育を考えましたのです。

昭和六十年に生涯学習体系への移行を打ち出した臨時教育審議会第一次答申は、これまでの社会を学歴偏重社会と位置づけたのです。それは、学歴社会だともいわれました。つまり、人生のどの段階でどのようなブランド名の学校を卒業したかによって、その人の一生を決めてしまう社会が学歴偏重、学歴社会です。前述の臨時教育審議会では、このようなことを続けければ日本の国は滅びるといふ危機感を持ち、その学歴偏重社会を是正する一環として「生涯学習社会」を提唱したといえましょう。

これからは、「生きる喜びを実感でき、人生を賢く、楽しく、健康でよりよく生きることができるとともに学習がある。」という考え方に立つことが大切です。つまり、乳幼児からお年寄りまで、こうした観点にたって学習していこうというのです。そうすると、教育や学習は、一流の学校への入学という目的だけではなくなります。そして、家庭や地域社会で人間としてよりよく生きるための学習が極めて重要ということがわかってきます。このような価値観の転換を図ることが生涯学習の根本にあるのです。そのため、社会教育が変わり、ついで学校教育が変わりつつありますが、残念ながらいまだ家庭での我が子に対する教育観はあまり変わらないと思います。これが問題なのです。

生涯学習は何のためにあるのかと聞かれると「この家に生まれ、この学校で学び、この地域社会で生活をし、この時代に生きて本当によかったと実感できるような自分の人生と地域社会を、自らの学習活動を盛んにすることによって実現しようとする。」と話しています。

「この家に生まれてよかったと家族構成員の一人ひとりが実感するための学習とはこういうもので、その学習の成果を生かした実践活動はこうあるべきだ。」ということや、「この学校で学んでよかったと子どもが実感するには、このような学習活動を展開するのがよい。」ということなどを具体的に考え実践する時期にきています。さらに、この地域で生活をして本当によかったという地域は、どういう地域なのかという大きな課題も残されています。